

GOOD NEWS
と きの こ え

誘惑への対処法

ウエンディ・モーリス

あなたは、誰にも見られていない時、どんな誘惑に駆られますか？ 私は、家に一人でいてアイスクリームの大きな箱を持っていたら、夫の分まで食べてしまいたくなる強い誘惑を感じます！ きっと、「それはささいなことだ！」と思われるかもしれませんが、私たちが皆、さまざまな誘惑を受けるので、注意して心を備える必要があります。罪を犯す誘惑に駆られたとき、どうすればいいのでしょうか？

新約聖書には、悪魔が荒野でイエスを誘惑し、イエスが三種の誘惑それぞれにどう対応したかが記されています（マタイによる福音書4章1～11節）。神は、イエスが安全な場所にいる時ではなく、荒野にいて疲れ果て、孤独で空腹な時に誘惑を受けることを許されました。そして、私たちが誘惑を受けるのも、肉体的に疲れている時、孤独な時、将来への疑問に直面している時、たいていそのよ

うな時です。
この誘惑による試練の出来事は、イエスが人であったことを示し、私たちが誘惑に遭う時に倣うべき模範を示しています。イエスは誘惑されましたが、誘惑には屈しませんでした。イエスは、私たちの誘惑との闘いを理解してください、誘惑に対処し罪に打ち勝つための鍵を示してください。イエスの助けがあれば、誘惑の圧力に耐えることができるのです。

悪魔の最初の誘惑は、十日間の断食後のイエスに、その空腹を満たすために石をパンに変えて肉体の必要を満たさせようとしたことでした。しかし、イエスはすぐに聖書の言葉（申命記8章3節）を引用し、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と、神が自分の必要を満たしてくださると断言しました。誘惑と闘うための最初の鍵は、神の御言葉（聖書）を知り、神と親密な関係を保って生きることや、神が日々備えてくださっている恵みの約束について聖書が何と語っているかを知ることです。

毎日、聖書を学び、神と対話する時間をもつなら、自分の考えではなく神の霊に導かれて生きようになるでしょう。

二番目の誘惑で、悪魔はイエスに、権力と支配を求めて神に挑戦するようにそのかししました。悪魔は、神殿の一番高い所から飛び降りるようにイエスに勧め、聖句を不適切に使って、神が天使を遣わしてイエスを危険から守るだろう、と言いました。しかし、イエスはここでも、聖書の言葉（申命記6章16節）を適切に引用し、「あなたの神である主を試してはならない」と言われしました。神の存在を示す証拠を求めるのは魅力的かもしれませんが、神は私たちが信仰によって生きることを望んでおられるのです。誘惑に対処するための第二の鍵は、信仰を深めるために時間を費やすことです。他のクリスチャンと共に礼拝に出席しましょう。誘惑に負けて間違った選択をしたり、神があなたを大切に思っていることの証拠を求めそうになる時に、信仰の友があなたを戒め、励ましてくれるでしょう。

最後に、悪魔はイエスにこの世の力を提供して自分を拝むように誘惑しました。が、イエスは力強くお答えになりました。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」と。悪魔は十字架という犠牲を伴わないこの世の栄光を差し出し、イエスの視点をゆがめようとしたのです。悪魔は今日、私たちにも、物質的な富や楽な生活で誘惑しようとしています。第三の鍵は、この地上での生活は一時的なものであるが、天国での命は永遠であると知ることです！ あなたを最も愛してくださっている神との将来の栄光を、目の前の満足のために犠牲にしないようにしましょう。地上にいる間、私たちは罪と闘いますが、神の力により、その闘いに負けることはないのです。

三つの誘惑を退けたイエスについて聖書はこう記しています。「そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。」（マタイによる福音書4章11節）私はこの言葉が好きです。あなたが誘惑に耐えるとき、天使がイエスのもとにきたように、神の守りと配慮があなたにあり、イエスに対する信仰が強められて生きることができると確信しています。

（救世軍士官（伝道者））

神様が家族と共に 歩んでくださる

信仰の継承—守られ、支えられ、これからをお任せして



しげ た し のぶ
繁田 忍 さん

(救世軍名古屋小隊所属)

「天の父よ、きょうの命を感謝いたします。愛の働きをする腕、慰めの手紙を書く手、病氣の方を訪ねる足、福音を語る口。きょう私は何をしたらよいでしょうか、何に気を付けるべきでしょうか。私の性格、人と人との関係、家族への思いやり。天の父よ、どうか私の心を潔めてください。世界の人のために流される、あなたの涙を思い、世の救

いのために、きょうもお役に立つことができますように。アーメン。」

これは、私の実家で今も斉唱される「朝の祈り」です。親元を離れ、結婚し、自分の家庭を築くようになってから、いつしかこの「朝の祈り」は私の日課ではなくなりましたが、五十四歳になる今日でも暗唱できることは感謝です。

子どもの頃— 両親に守られた信仰の小さな灯

私は一九六八年、繁田家の次男として生まれました。父と救世軍との関わりは、父が五歳の頃、旧静岡小隊（教会にあたる、現・静岡小隊）会館の近所に引っ越してきた頃からでした。父は兄弟たちと日曜学校に通うようになり、救世軍のブラスバンドに加わりました。その後、地元の楽器店に就職し、ピアノ調律師の資格を得、

いただいた音楽の賜物で生計を立てるようになりました。静岡小隊在籍期間中は、楽長としてご奉仕をさせていただきました。父は現在八十一歳。長崎で老後生活を送っていますが、市内のイベントでハーモニカ演奏をするなど、今でも神様からの賜物を大切に活かしています。

母は二歳の頃、父（祖父）を病気で亡くし、母子家庭に育ちました。彼女の母（祖母）は熱心な仏教徒でしたので、母は幼い頃に亡くした自分の父のことを想い、仏壇に手を合わせていたそうです。高校を卒業し、父と同じ地元の楽器店に就職した時、初めて父から手渡



静岡小隊。両親と兄とファミリーコーラス

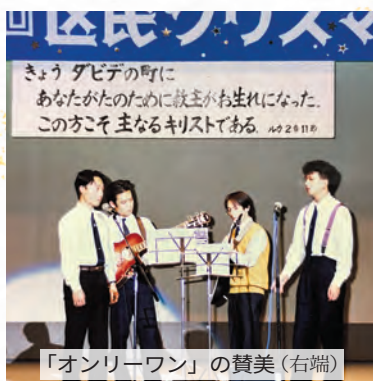
された聖書にふれ、イエス様の存在を知りました。その後父と結婚し、静岡小隊で兵士（信徒）となりました。静岡小隊在籍期間中は、日曜学校教師、青少年部会計、オルガニストのご奉仕をさせていただきました。

私の幼少期、母は自宅で近所の子どもたちにピアノを教えていましたが、私は両親からのピアノの誘いを断り、昆虫探しに没頭する毎日でした。中学生になってからは部活が忙しくなりましたが、日曜日は毎週家族六人（父、母、祖母、兄、私）で静岡小隊へ通いました。献身的な両親の信仰とは対照的に、私は「受け身」

青年の頃—信仰の友、 先輩たちとの出会いに恵まれて

の姿勢で小隊に繋がっていました。この頃の私の信仰は吹けば飛びそうな小さな灯でしたが、父と母がその灯をしっかりと守ってくれました。救世軍の子ども向け歌集にある「わたしは小さい燈、ひかりましょう」を日曜学校で賛美したことは今でもよく覚えていて

私は地元大学を卒業後、鉄鋼メーカーへの就職を機に静岡の実家を出ました。会社では自社研究開発の案件を新規事業化する部門に配属されました。平日は会社勤め、土日は独身寮のあった東京都八王子市から電車で一時間半かけて京橋小隊まで通い、青年たちでの賛美に没頭しました。当時の京橋小隊には社会人クリスチャンの大先輩や信徒の方々、親や祖父母の代からのクリスチャンホームに育った青年たちもおり、居心地の良さを感じました。中でも土曜夜の京橋・月島小隊合同ブラスバンドの練習は楽しかったのを覚えています。日曜日は聖別会、愛餐会、野戦（街頭での短い伝道集会）、救霊会（伝道集会）を熟し、夜は京橋小隊の友人宅に屯し、



「オンリーワン」の賛美（右端）



京橋小隊バンド（前列右から2人目）

「練習」と称する賛美に没頭しました。当時ア・カペラで賛美した「主は御座におられる」は、今も心の中で鳴り響きます。京橋

家庭を築いて――

環境の変化、子どもたちへの思い

一九九〇年代の日本経済は、平成バブルが弾け、鉄鋼メーカーの本業以外の事業再編が加速し、私の所属する新規事業部門も遂には撤退となりました。このため一九九三年から千葉県館山市の半導体子会社へ出向となりました。近くに小隊がなかったため、館山から百五十キロの道を五年間、京橋小隊まで通いました。館山に住んでいた一九九八年に、救世軍士官（伝道者）の子女である昭子と結婚し、私たちの新しい家庭生活が始まりました。その後

小隊主催の市民クリスマスイベントで賛美奉仕をさせていただいたことも感謝でした。



次男幼少期。名古屋で社会鍋のお手伝い



最近の長男と次男

長男（**凧**）は、イエス様が命じられると海は凧になった（マルコによる福音書4章39節）という聖書箇所からとった名前です。二〇〇一年九月十一日、アメリカ・ニューヨークで同時多発テロ

私は当時、両親が神様から与えられた音楽の

すべての子どもが神様から愛されているということに基づき、それぞれの個性を大切にすることができた。

息子たちは成長し、カトリック系の中学・高校に入りましたが、思春期を迎

えられた音楽の賜物があるのに、自分の幼少期に楽器を習得できなかったことに対して、後悔の念がありました。このため自分の息子たちには、幼少期から何らかの音楽の賜物を育んでほしいという気持ちがありました。二人には

子どもたちの成長

――神様にお任せして

私たちが四人家族が長崎から名古屋に引っ越してきた二〇〇八年当時は、長男は六歳、次男は二歳半でした。この時期に名古屋小隊に加えていただいたことも神様の準備された大きなお恵みでした。当時の名古屋小隊長（牧師にあたる）は、子どもたちを分け隔てなく愛し、その時々に必要な事を的確に教えてくださいました。また同世代のクリスチャンファミリーのいる賑やかな日曜学校があったことも、子どもたちにとっては良い信仰の成長の場となりました。そして名古屋小隊の信徒の方々も我が子、我が孫のように、息子たちを愛してくださいました。

違った音楽の賜物を養ってほしいという思いから、長男にはピアノを、次男にはバイオリンを、それぞれ習わせることにしました。二人がいつか、異なる楽器を用いて神様を賛美する日が来ることを願っています。

私たちが四人家族が長崎から名古屋に引っ越してきた二〇〇八年当時は、長男は六歳、次男は二歳半でした。この時期に名古屋小隊に加えていただいたことも神様の準備された大きなお恵みでした。当時の名古屋小隊長（牧師にあたる）は、子どもたちを分け隔てなく愛し、その時々に必要な事を的確に教えてくださいました。また同世代のクリスチャンファミリーのいる賑やかな日曜学校があったことも、子どもたちにとっては良い信仰の成長の場となりました。そして名古屋小隊の信徒の方々も我が子、我が孫のように、息子たちを愛してくださいました。

小さな信仰の灯は、その後家族が与えられ、生活環境が大きく変化する中で、幾度となく試練に遭いましたが、決して消えることはありませんでした。館山では京橋小隊が支えとなり、横浜では横浜小隊が支えとなりました。諫早・長崎では近くに小隊がなく、百五十キロ先の福岡小隊へは月一回程度しか通えませんでした。私が、地元長崎の教会が支えとなりました。そして、現在に至るまで名古屋小隊が私たち家族の信仰の支えとなっています。各小隊の信徒の方々ははじめ、多くの兄弟姉妹の祈りに支えられながら、神様が私たち家族と共に歩んでくださっていることを覚えます。

聖書の「善いサマリア人」のたとえ（ルカによる福音書10章25～37節）では、共に歩んでくださるイエス様の姿がわかります。息子たちには多様な環境変化の中でも、偏見なく人を愛すイエス様の姿を見つめ、実家の「朝の祈り」にあるように、日々の感謝と自らの行動を振り返りながら、神様と共に力強く歩んでいってほしいと思っています。



世界をみつめて

〈日本〉 災害備蓄水の輸送

松屋銀座様から災害備蓄用非常水が救世軍に寄贈され、4月15日(金)の受領当日、その一部の60箱の非常水(1箱550ml×24本)を東北地区の災害救援拠点である救世軍仙台小隊(教会にあたる)へ輸送し、保管することができました。平時における緊急災害への備えとなりました。

今回の輸送は、緊急時における支援物資の長距離輸送訓練を兼ねており、徹底した安全管理のもとに総合的な災害への対応訓練としておこなわれました。



〈パプアニューギニア〉 成人のための識字教室

ホホラの救世軍では今年5月から、成人のための識字教室をおこなっています。73歳のピーター・タリさんはそのクラスで学び始めて3週間目で、アルファベットを読むことができるようになりました。6カ月間のプログラ



ムを修了して、家族や友人と聖書を読むことができるようになるのを楽しみにしています。現在、パプアニューギニアではホホラを含め4カ所の小隊で成人のための識字教室がおこなわれています。

〈ポーランド〉 ウクライナ難民の子どもたちへの支援



首都ワルシャワの救世軍ではウクライナからの難民の子どもたちのための「土曜クラブ」を開始しました。父親はウクライナに残り、母親や親戚と一緒に避難して来たという子どもたちが大勢います。ワルシャワの救世軍の責任者は「子どもたちがほっとできる場所、彼らが目にしてきた戦争の恐怖を忘れることができる時間を提供したいと考えています。毎週土曜日、一



緒にゲームをしたりウクライナのお菓子を作ったりして楽しい時間をもっていきます」と語っています。

〈オランダ〉 マキシマ王妃が救世軍の施設開館式に

6月、アムステルダムに「メイジャー・ボシュハルト・ハウス」が開設され、オープニングにはマキシマ王妃が出席されました。オランダの救世軍士官アリダ・ボシュハルト大佐補(1913～2007年)は、第二次世界大戦終結直後から半世紀にわたってアムステルダムの赤線地帯(売春営業許可区域)で困窮する人々の更生、支援のために力を尽くし、キリストの愛を伝えました。この度開設した施設は、彼女が実際に人々を保護し支援していた建物です。彼女の人生と奉仕について、また救世軍が現在おこなっている活動を学ぶことができます。



救世軍とは? What is The Salvation Army?

心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、世界132の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国・ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で、貧しく、社会から疎外されていた人々の救いのために活動が進められました。日本での働きは1895(明治28)年に英国から士官(伝道者)が派遣され始まりました。

救世軍では青少年のため、各小隊での日曜学校(子どものための聖書の学び)や、夏のキャンプなどをおこなっています。青年の信仰成長と他者への奉仕を学ぶ特別なプログラムもあります。子どもたち一人ひとりが神の目に尊く、かけがえのない存在であることを知り、キリストと共に生きることができるよう祈りながら、活動が続けられています。 救世軍青少年部公式YouTube →



救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日(除く7月)
定 価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振 替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。